MUSEUM ちば

千葉県博物館協会研究紀要

東京都三多摩公立博物館協議会
合同研究号

目　次

【特集】博物館・美術館が地域にできること　～子ども達のために～
研究紀要発刊によせて
●テーマ設定の理由と２年間の活動概要 …… 1
●平成22年度合同研究年間計画 …… 2
●視察報告
○清瀬市郷土博物館 …… 3
○くにたち郷土文化館 …… 5
○府中市郷土の森博物館 …… 7
●合同事例報告会
○「展示・運営協力会」との連携について
千葉県立現代産業科学館　上席研究員　小池正樹 …… 9
○房総のむらにおける親子参加型体験事業　―　子どもから親子へ　―
千葉県立房総のむら　広報・普及グループ長　神野　信 …… 12
○武蔵野えどまる団　～たてもの園居場所づくり大作戦～　の活動
江戸東京たてもの園　学芸員　高橋英久 …… 14
○こどもに夢を　大人には新しい発見を
八王子市こども科学館　主査　森　融 …… 16
●子ども対応アンケート調査
○千葉県博物館協会アンケート集計結果から見る傾向と課題
○千葉県博物館協会内アンケート集計結果 …… 18
●平成23年度合同研究年間計画
●視察報告
○浦安市立郷土博物館 …… 43
●合同研修報告
○ホテルサービスから見た子ども（家族）対応 …… 45
●合同シンポジウム
○基調講演　「地域と博物館」
文化庁文化財部美術学芸課長　栗原祐司 …… 50
○事例報告
・博物館教育の活性化に関する課題と提言―誰のための教育かを真剣に考える―
千葉県立中央博物館　教育普及課長　新　和宏 …… 55
・美術館ボランティアとともにすすめる鑑賞プログラム
千葉市美術館　学芸員　山根佳奈 …… 63
・子ども達のために　～東村山市・八国山たいけんの里を例に～
東村山ふるさと歴史館　学芸員　石川正行
・国立ハンセン病資料館における試み
国立ハンセン病資料館　学芸課長　黒尾和久
○パネルディスカッション　「博物館・美術館は子ども達に何ができるのか」
コーディネーター　国立歴史民俗博物館　教授　小島道裕
パネラー　東京成徳大学　教授　青柳隆志
我孫子市立布佐南小学校長　斎藤　仁
新　和宏・山根佳奈・石川正行・黒尾和久
コメンテーター　栗原祐司 …… 69
●シンポジウム紹介記事
・千葉県博物館協会加盟館一覧　・東京都三多摩公立博物館協議会加盟館一覧
・合同研究メンバー一覧
結びの言葉にかえて

第42号
2012年3月
千葉県博物館協会

平成２２・２３年度

千葉県博物館協会調査研究委員会・東京都三多摩公立博物館協議会企画委員会

【合同研究テーマ】

「博物館・美術館が地域にできること」
～子ども達のために～

勾玉づくり講座の一場面

研究紀要発刊に寄せて

千葉県博物館協会会長
鴨川シーワールド館長
荒井　一利

千葉県博物館協会調査研究委員会では、平成２０年度より、「博物館・美術館が地域にできること」というテーマの下で調査研究活動を進めている。平成２２・２３年度は、同様のテーマを継続し、地域と一体となった博物館活動、とりわけ、子ども（学校）対応の充実を図ることを目的とし、「博物館が地域にできること～子ども達のために～」をテーマとした。

このテーマの下で調査研究活動を進めるにあたり、あらためて市町村立規模の博物館・資料館に注目し、さらにより広い視野に立ち、他地域の博物館組織と共同で活動することとなり、東京都の中でも意欲的な活動をされている東京都三多摩公立博物館協議会と共同研究を進めることになった。

平成２２年度は千葉側が三多摩地区を視察・調査し、その結果を発表する事例報告発表会を平成２３年２月１７日に三多摩地区の府中市郷土の森博物館で開催した。また、平成２３年度は、平成２４年１月１９日に両会加盟館職員参加の合同シンポジウムを千葉県立中央博物館で開催した。

東京都三多摩公立博物館協議会と共同で実施してきた研究調査結果を、このたび本研究紀要でまとめていただくこととなり、これらの報告が両会および両会加盟館の発展の一助になれば幸甚である。

最後に、本紀要を発行するにあたり、ご協力いただきました東京都三多摩公立博物館協議会の岡田会長をはじめ加盟館職員のみなさまに心より御礼申し上げます。

東京都三多摩公立博物館協議会会長
日野市郷土資料館館長
岡田　忠昭

はじめに、東京都三多摩公立博物館協議会と千葉県博物館協会との合同研究の場を与えてくださった、関係者皆様のご努力に感謝いたしますと共に両会の距離が離れているにもかかわらず、研修会やシンポジウムといった事業の実現に寄与された、担当者各位のご熱意にお礼を申し上げます。

平成２２年度から２年間をかけ、「博物館・美術館が地域にできること　～　子どもたちのために」というテーマで合同調査研究を行うにあたりましては、お互いに会場を提供しながら、それぞれの施策や現状を確認し合い、学びと感銘を受けたものと感じます。

そこで、生涯学習分野での知識と経験に浅い私が今回の合同研究で感じましたことは、まず第１に千葉県はすべての意味で広いということ、その次に、そこに暮らす人々の感性にも大らかさが宿しているんだろうな、ということ。最後に、その施設が立派であること。また、様々な産学・博学・地域との連携が盛んに実践され、住民協働を研究実践されていることを学びました。

今回の調査研究テーマは、「～子どもたちのために」となってはいますが、子どもたちは、一人で博物館や美術館を訪ねることは少ないと思います。そこには、家族・学校・地域などが必ず関連してきます。ということは、博物館や美術館などの役割は、地域の歴史や民俗・民具などの伝承をし、学びの場であると共に、そこに来ると「何か楽しいことがある」場所である必要があるということです。「楽しい」という言葉は大変難しく、遊ぶ要素と学ぶ要素、そしてそこから個々の観覧者が、如何に夢を発展させる要素や感銘を与えることができるかということに尽きると思います。

大人たちが懐かしく感じる事実や歴史を、子どもたちに興味を持たせるか・唯の昔話に終わらせてしまうかは、引率者やそこに関わる博物館・美術館の関係者・大人たちの熱意が重要な役割を担っています。

先日、世界的にも有名なアミューズメントパーク内に存在する、某ホテル内で両委員会による合同研修会が行われ、子どもたちを接待する接客係りの方の講義を受ける機会がありました。大変流暢な話しぶりに感銘を受けると同時に、子どもを「子ども」としてではなく、小さいけれども「一つの個性」として捕らえていることを学びました。それだからこそ、常に新しい楽しさを与え続けることができるのだということに気づかされました。

末尾になりますが、この度の合同研究のテーマ「博物館・美術館が地域にできること　～子どもたちのために」とは、「未来に向けて学ぶ楽しさを伝えることなのか」と感じた次第です。２年間という短い期間でしたが、両会にとって大変参考になり、よい勉強をさせていただいたと感謝しています。この間に築きました、連携の輪を絶やすことなく、今後も継続できますことを祈念し、挨拶とさせていただきます。

◆テーマ設定の理由と2年間の活動概要

平成２０・２１年度千葉県博物館協会調査研究委員会では、「博物館・美術館が地域にできること」というテーマの下、２年間の期間をかけて県外の教育普及先進館の視察、シンポジウムの開催及び研究紀要の発行を行った。地域と一体となった博物館等の取り組みの事例として、主に市民ボランティアや NPO の活動を中心とした博物館活動の支援体制にスポットをあてた調査・研究となった。

２２年度に委員が入れ替わり、県立現代産業科学館の小池、芝山古墳・はにわ博物館の奥住、船橋市郷土資料館の菅野を新たに委員に迎えた。新しい顔ぶれでスタートした調査研究員会では、２２・２３年度の新しい研究テーマを決めるにあたり、引き続き同様の研究テーマを設置したが、副題として「～子ども達のために～」という文言を入れた。これは子ども達（学校）への、より良い対応を課題としている館が非常に多いことを受けて、博物館として子ども達に何ができるだろうかという視点で調査研究を進め、その成果を広く加盟館に還元して、子ども対応の充実を図ってもらうことを目標とした。

今回は、特に市町村立規模の博物館・美術館に注目してみたいと考え、また県内の調査研究にとどまらず、より広い視野に立って他地域の博物館組織と共同で、調査研究を行うこととした。そこで、東京都の中でも意欲的な活動をされている三多摩地区の博物館協議会（以下、三博協）に共同研究の呼びかけを行った。その結果、先方も他の博物館協会との交流を通して職員の研修をより充実させたいという意向があり、また千葉と東京は隣接しているため、比較的視察や会議等も行いやすいという利点があることから共同研究を行うことで協力して頂けることになった。

このようにして２２年度は、千葉側が三博協側の加盟館の子ども対応の様子などを視察させて頂くことになり、清瀬市郷土博物館を皮切りに、くにたち郷土文化館、府中市郷土の森博物館の計３館の視察を行った。また、両地域の子ども対応の実態を把握するため、合同でアンケート調査を各加盟館に実施した。その結果はこの研究紀要で報告させて頂いているので、是非ご覧頂きたい。

２２年度末には、共同研究１年間のまとめの意味を込めて、合同の事例報告発表会を府中市郷土の森博物館で行った。この報告会では三博協加盟館職員も参加できるようにし、三博協側２館（江戸東京たてもの園・八王子市こども科学館）、千葉県側 2 館（千葉県立現代産業科学館・千葉県立房総のむら）の計４館の事例報告と質疑応答を行った。

２３年度は、三博協側の研修視察対象として、７月１３日に浦安市郷土博物館において合同研修会を行った。幼稚園児の受入の様子を参観し、担当者の話を聞くなどした。三博協側加盟館からは、当日２０名の参加者があった。

１１月には、両会委員のみの研修会とし、博物館側の視点だけではなく、異業種から見た「子ども対応」等についてホテルマンを講師として、舞浜のシェラトングランデトーキョーベイホテルを会場に研修を行った。

また、研究２年目の総まとめの年となることから、２４年１月には、両会加盟館職員及び教育委員会関係者参加の合同シンポジウムを県立中央博物館を会場に開催した。

そして２年間の研究成果をまとめるため、「MUSEUMちば」第４２号を作成し、両会加盟館に配付した。

これらの研究成果が、子ども（学校）対応に際してヒントになることを切に願い、また両会の交流が今後も続いていくことを期待している。

調査研究委員会　佐藤　誠

平成２２年度　県博協・三博協　合同研究年間計画

時　期	主な活動内容	会　場
６月２９日	・第１回調査研究委員会 テーマ決定・活動予定等 三多摩公立博物館協議会への打診	八千代市立郷土博物館
８月１９日	・第１回合同委員会 研究テーマの説明と承認 今後の活動計画について 加盟館への視察協力依頼について 施設見学と質疑応答	清瀬市郷土博物館
１０月	・合同アンケート案の作成 「子ども対応の実態調査」	両委員会事務局
１１月	・合同アンケート調査の実施 「子ども対応の実態調査」	両委員会事務局
１２月	・アンケート回収と集計	両委員会事務局
１月２８日	・第２回合同委員会 アンケート集計結果の報告 合同事例報告会について 施設見学と質疑応答	くにたち郷土文化館
２月１７日	・合同事例報告会（三博協加盟館） 施設見学と質疑応答（希望者） 研究経緯の説明 双方加盟館の事例報告（４館） 質疑応答	府中市郷土の森博物館

※（三博協加盟館）とあるのは、三博協加盟館職員の参加を前提とした研修会等である。

清瀬市郷土博物館の視察報告

八千代市立郷土博物館
主任学芸員　佐藤　誠（せい）

はじめに（三博協加盟館の視察の目的）

学校と社会教育施設の協力については、「学社連携」から特に「博学連携」、そして「博学融合」の時代に進んできている。平成２３年度から小学校で完全実施された学習指導要領の中にも、学校と博物館や資料館などの社会教育施設との連携強化が明示された。その背景には、現代の教育は学校だけでは対応しきれないという現実を踏まえ、「地域の子どもは、地域で育てる」という考え方が生まれた訳である。

市民文化センターと共用の博物館施設

このような考え方が注目された理由としては、学校現場の現状として、生徒指導に苦心している学校ほど創意工夫して授業を作り上げていく余裕がない教師が多いことが挙げられよう。

また最近では、団塊の世代の教師が大量に退職する時代を迎え、都市部を中心にようやく若い教師が採用されるようになった。しかしその結果、ベテラン教師と若年教師の組み合わせによる学年が増え、若手の育成指導を担当するベテラン教師は、教科指導や学級経営指導等について多くの時間を費やすようになった。その結果、ベテラン教師がゆとりを持って教育計画などを立てにくい状況が生まれ、教師だけで体験活動を含む創意工夫された教育活動を常に展開し続けることは、非常に困難な時代となってきている。

合同研究に向けての両委員の初会合

このような状況の中で、保護者や地域の住民、博物館や図書館、公民館等の地域の社会教育施設、地元の企業などが「地域の中で私たちが育てる子ども達」という共通意識を持って学校教育に参加する環境づくりが、今、重視されている。博物館や資料館は「地域の第２の学校」というスタンスをとり、学校の良きパートナーとなることが強く望まれる。文科省や文化庁、都道府県が主催する最近の学芸員研修会でも、「博学連携」は、常にテーマとして取り上げられることが多い。学校教育に対して博物館学芸員は、如何に教師との強いパートナーシップが築けるか、常に模索していかなくてはならない時代を迎えていると言えよう。

今回、東京の三多摩地区の加盟館を視察させて頂くにあたり、上記のような視点を持って、それぞれの館が取り組んでいる現状を視察させて頂いた。また、合同研究の共通理解を図るため、視察後には両会初めての合同会議を、清瀬市郷土博物館で開催させて頂いた。

1　館の概要

東京都三多摩公立博物館協議会加盟館であり、２２年度の会長館でもあった清瀬市郷土博物館は、東京都の多摩地区の北東部にあり、埼玉県と隣接した地域である。

清瀬周辺は、古くは養蚕・製糸・村山絣（かすり）の製織で栄えた農村部を主体とした地域であった。平成１８年には、江戸末期頃まで使われていた「うちおり衣料」と呼ばれる自家製の衣料が、清瀬の民俗文化を代表する資料として、市指定有形民俗文化財に指定されている。

洗練された展示室

清瀬市郷土博物館は、平成２２年度に開館２６年目を迎え、このような民俗資料の他、考古・歴史・自然等の分野に於いて、市民に郷土の歴史・文化を展示を通して分かりやすく伝えている。また、もうひとつの特徴として、市民文化センターの施設と共用であるという点である。センターを利用するたくさんの市民の方々や市民団体があり、それらの人々が気軽に博物館を利用できるというメリットもある。１階にはランチもできる喫茶スペースもあり、視察当日も多くの市民で賑わっていた。両施設合わせての入館者は年間５万人以上で、いかに多くの市民に愛されている施設であるかが、入館者数からも見て取れる。

2　子ども対応

子ども対応としては、地元小学校の地域を学ぶ学習として見学や「昔の道具」体験を行っている。また、夏休みに開催してきた「昔のくらし体験」がある。これは、子ども達は朝から夕方まで館に滞在して、うどん作りをしたり、「サキ織り」という裂いた布を使った織物を体験したり、昔のおもちゃなどを作って過ごす。

トウミなどが並ぶ民俗資料のスペース

館には、施設の一つとして古民家が隣接しており、そこにあるかまどや板の間などが利用できる。館の敷地内に古民家を移設する博物館も多いが、かまどを使って実際に調理できるメリットは大きい。いろりに火をおこし、かまどで煮炊きをするという使い方ができる古民家があるということは、保存管理面で良いだけでなく、子ども（学校）対応をする中で、大きな役割を果たせる。ただ運営上大変なのは、実際に体験する子ども達を、安全に指導する職員が、充分確保できていなければならないということであった。

体験でも利用される古民家のカマド

くにたち郷土文化館の視察報告

船橋市郷土資料館
学芸員　菅野泰久

平成23年1月28日に、東京都三多摩公立博物館協議会の加盟館であり、学校向けの体験学習を積極的行っている、くにたち郷土文化館にお伺いし、体験学習の様子・館の方針・館内を視察させていただいた。

1　国立市とくにたち郷土文化館の概要

国立市は人口74,447人（平成23年1月現在）、面積8.15㎢。東京都の中央部にあり、閑静な住宅地と一橋大学をはじめ多く教育機関がある文教都市である。また、東京都内にもかかわらず、市域南部には豊かな自然が残っている。

くにたち郷土文化館は、1994年に開館した市立の博物館である。運営は、財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団が開館から行っている。職員は常勤・嘱託を含め10名で、うち学芸員は3名である。

エントランス

施設は、地上1階、地下1階の鉄筋コンクリート造、延べ床面積2,181.73㎡。建築家石井和紘氏の設計による、開放感のある造りとなっている。1階はエントランスホールと多目的ホール。地下に常設展示室・特別展示室・収蔵庫・事務室・講堂・研修室などがある。入口から両面ガラス張りで、廊下中央に埋め込み式の展示ケースが配されているエントランスホールを抜け、地下の展示室へ向かう。地下は、通路の一方が展示室・事務室・研修室となっており、もう一方はガラス張りで、野外には、古代ローマのコロシアムを半裁したような中庭（歴史庭園）があり、開放感のある空間が演出されている。

グリーンカーテン、展示室への人感センサー設置、展示室のスポットをLEDに切り替えを行うなど、積極的な省エネの方針で館を運営し、エコな博物館を目指している。

常設展

2「民具案内」について

くにたち郷土文化館では、小学校3年生が学ぶ「むかしの暮らし」に合わせて行っている館収蔵資料を活用した体験学習事業を「民具案内」と呼んでいる。1月～3月にかけて、市内にある小学校11校（公立8校・私立3校）が来館し、体験学習を行っているとのことである。

「民俗資料を用いて道具の変遷を学ぶとともに、自ら民具に触れることにより過去に生きた人々の生活だけでなく現在の生活についても改めて見つめ直し、さらに未来のあるべき姿を模索する機会とする。また、洗濯板を使用しての洗濯や石臼ひき、わらを材料とした縄ない体験などを通して、地元の高齢者

とのふれあいの中で郷土文化を学び、継承し、モノの大切さや創造することの喜びを実感することを目的とする。」(『くにたち郷土文化館年報 11 号』より）をコンセプトとして掲げ、実物の民具を使った体験学習の中に、高齢者と子どものふれあいと郷土文化の継承にも重点が置かれている。

視察当日は市内の私立小学校の 3 年生約 120 名が来館し、「民具案内」を体験していた。体験は中庭と研修室を使い、全体での説明が行われた後に、幾つかのグループに分かれ、ローテーションで各体験を行うという形を採っている。全体の進行は学芸員が行っているが、子どもたちに民具の扱い方を教えるのは、主にボランティアがあたっていた。ボランティアは、失われゆく民具や生活様式の収集・記録を行っている団体「くにたちの暮らしを記録する会」に属しており、民具の扱いに熟練している。会員は 20 名おられるということだが、当日は 10 名程が、民具の扱い方などを説明し、子どもたちの体験を支援していた。体験に使われている民具は、基本的には寄贈を受けた実物を使っており、民具を受け入れるときに旧所有者の同意を得て、保存するものと、体験学習用に使うものとを分けて受け入れているとのことである。体験で使用するため、可能な限り修理をしながら使っている。

3　視察当日の体験学習の内容

背負子・背負い籠	地下にある中庭で、背負子・背負い籠を担ぐ。
モッコ	２人１組になり、モッコを使い荷物を運ぶ。
大八車	大八車で俵を運ぶ。２人で車をひく。
洗濯	タライと洗濯板を使い、実際に洗濯を行う。
石臼	石臼をまわし、実際に大豆を挽く。
縄ない	藁を撚り、縄を作る。縄をつなぎ合わせ、長い縄を作る。

各体験を見学させていただき、子どもたちの生き生きとした表情とボランティアの方々の熱心で温かみのある指導が印象的であった。縄ない体験では、できた縄を使い、中庭では縄とびをする子どもたちの姿も見られ、ボランティアの方々も子どもたちの自発的な動きを温かく見守っていた。一方で、大八車を引いている子どもを驚かせようと荷台に腰掛けようとした大人が、ボランティアの方に、危ないということで注意を受ける場面もあった。

提供する側の手法によっては単なる遊びになってしまいかねない体験学習を、子どもたちの自由な発想を活かしつつ、しっかり“学ぶ”ことが出来る素晴らしい体験学習プログラムが組まれていると感じた。

大勢の児童を対象に、これだけ多くの体験を同時進行していくためには、館の努力だけでなく、学校教諭との綿密な打ち合わせなどの学校との連携、実際に民具の扱い方をアドバイスする数多くのボランティアの力が必要であることを実感するとともに、このような体験学習を実現している国立の方々のご努力と熱意に感心させられる視察となった。

府中市郷土の森博物館の視察報告

芝山町立芝山古墳・はにわ博物館
学芸員　奥住　淳

1　府中市郷土の森博物館の概要と展示リニューアルについて

東京都府中市は、古代には武蔵国府が置かれ、江戸時代には甲州街道の宿場町として発展してきた歴史と多摩川や丘陵地の自然に恵まれた都市である。当館は、多摩川のほとりに 14ha の敷地面積をもつ広い敷地のなかに、博物館・プラネタリウムをはじめ、町役場や町屋の建物、茅葺農家などを復元した府中の街を再現した通り、その周りには田畑、雑木林、池、梅園などが配置された総合博物館であり、四季を通じたレクリエーションの場として活用されている。

また、昭和 62 年に開館した当館では、段階的に展示リニューアル事業を進めており、そのなかで、平成 21 年 3 月に常設展示室に「こども歴史街道」と「体験ステーション」の二つの参加・体験型の展示コーナーを新設した。そのコンセプトは、子どもたちが「みて」「ふれて」「きいて」「かんがえる」ことができる展示、常設展示の基幹展示部分と参加・体験型展示の融合とした。

2　こども歴史街道

「こども歴史街道」は、常設展示室の一方の壁面約 60mを利用して、原始古代から近現代まで各時代のポイントとなる事象を選び、それぞれ体験できる仕掛けのアイテムを用意して紹介している。その展示方法は、壁面に埋め込まれたケースに資料を展示して、その前に置かれたテーブルに触ったり聞いたりできるアイテムを置くというものである。例えば、原始のセクションでは「ムラができた」というタイトルで、模造した縄文土器を置き、その前で縄文土器の模様づけが体験できる。また、古代では武蔵国印を押すことができたり、江戸時代では、古文書の筆写や府中の名所を巡る双六遊び、近現代では、当時の教科書を見たり唱歌を聴くことができたり、自転車の後部座席に取り付けられた紙芝居が再現されている。

そして、歴史街道は、常設展示室の壁面を利用することで、独立した動線で体験しながら観ることができる。一方で、すぐ隣には常設の基幹展示があるので、歴史街道の方では文字解説を減らすことも可能にしている。

したがって、通常、体験学習室が分かれていると常設展示と乖離してしまったり、通常展示のなかに体験コーナーがあると埋没してしまうことがあるが、当館では、常設展示と体験コーナーを相互補完することで、その融合を目指している。

3　体験ステーション

一方の「体験ステーション」は、常設展示室の反対側に位置する廊下のような空間を利用したもので、壁面にテーブル、鏡張りのクローゼット、ロッカーが置かれている。テーブルには、引き出しのなかに土器や石器、昆虫標本を入れて間近に観察できるようにしてある。鏡張りのクローゼットには、奈良時代の国府の役人の衣装や戦国時代の兜が入っていて身につけることができる。また、ロッカーにはケンダマ、メンコ、ヨーヨー、お手玉といった昔の遊びの道具、ゆたんぽ、炭火アイロン、尺貫法の身長計、手回し式の計算機などの昔の道具が収められていて、手にとって遊んだり触れたりしながら体験することができる。さらに、パソコンや子ども向けの図書なども置かれているので、調べ学習などにも対応できる。

このように、このコーナーでは、常設展示のなかでは位置づけにくいものや娯楽性の高いアイテムを用意しているのが特色である。

4　まとめ

このように、当館の子ども向けの展示は、「こども歴史街道」と「体験ステーション」を中心に非常に充実した内容になっている。特に、歴史街道では、通常、体験型の展示は、考古を中心とする原始古代よりも、中世や近世など古文書が中心となる時代のものはなかなか難しい面もあるが、当館ではその点も克服するヒントが多くあるように感じた。

また、体験ステーションでは、考古・歴史・自然・民具と様々な分野の体験ができるのが魅力である。実際に、二つの展示が加わってから展示室での滞在時間が増え、会話が増えたと言う。当館の入館者は 30 万人を超え、リピーターも多いことが想像されるが、その理由は、博物館と公園が一体化している上、施設や催しも多彩なこともあるが、団体や家族、個人などあらゆる利用の形態でも楽しめる体験型展示の存在もあるのではないだろうか。当館では今後も展示の更新を継続していくとのことであり注目していきたい。なお、当館の「こども歴史街道」と「体験ステーション」については、『博物館研究』第 44 巻第 12 号（2009 年）で報告されているので参照させていただいた。

合同事例報告会　事例発表（於：府中市郷土の森博物館）

「展示・運営協力会」との連携について

千葉県立現代産業科学館
上席研究員　小池　正樹

1「展示・運営協力会」とは

現代産業科学館の大きな特色の一つである「展示・運営協力会」は平成6年の開館と同時に設立された。常設展示に協力した企業、大学、研究機関等で構成され、展示活動の資料収集や調査研究に関する支援や協力を得ることを目的としている。開館から時が経つに連れ、展示活動の資料収集といった役割だけではなく、科学の原理や産業に応用された科学技術について県民に紹介し、科学の面白さ、科学技術の身近さ、出展団体の活動内容を実感してもらえるような取り組みが大きな役割となる。その事業としては、展示会、講演会、実験・工作教室、サイエンスショー等である。特に実験・工作教室やサイエンスショーは、主に子どもや子どもを連れた家族を対象として実施されている。現在、会員数は88、うち61は団体会員である。毎年理事会（２回）・総会を開催し、事業計画や利用状況について協議している。

2「展示・運営協力会」の事業

主な事業は、①展示会、②特設コーナー展示会、③サイエンスショー、④実験・工作教室である。形態は、主催：現代産業科学館展示・運営協力会、共催：現代産業科学館である。

展示会は、「各会員が専門とする分野を科学館にふさわしい展示として一般の来館者に公開し、新しい科学技術を紹介する。」趣旨で実施されている。平成 22 年度は、「ひらけ未来のドア！ 2010　最先端テクノロジーにふれてみよう」と題し、14 会員により 7 月 13 日～25 日に行われた。

展示会

サイエンスショー

特設コーナー展示会は、年間を通して今日的な産業技術についての研究開発・研究成果・新製品・活動内容の紹介の場としている。展示の期間は出展団体と協議のうえ調整している。

サイエンスショーは、会員が専門とする分野に関する実験や工作をショー形式で実施するもので、平成 13 年度から実施している。１回 30 分程度、対象は一般であるが、その多くは幼児、小学生のいる家族連れである。通常、当館でも科学実験を実施しているサイエンスステージ（70 名定員）を使用している。見学料は無料だが常設展示場内であるため、通常の入場料が必要となる。

3「展示・運営協力会」主催の実験・工作教室

実験・工作教室は、平成 16 年度から会員が専門とする分野に関する実験や工作を、参加者体験型

の方法で実施している。定員 20 ～ 30 名、時間は 90 分程度、保険料として 50 円を徴収している。対象は内容に合わせて設定しているが、小学生以上（3 年生以下は保護者同伴）に設定する場合が多い。体験学習室やエントランスホールを使用し、今年度はこれまでに、15 の会員が合計 37 回実施している。企業の場合は担当の社員が講師となり、大学の場合は先生だけではなく、コア・サイエンスティーチャー養成プロジェクトの一環として教員を目指す学生が講師となるケースもある。

当館で実施している実験・工作教室は、館主催で実施しているものや、千葉県教育振興財団との連携で実施しているものなど多数あるが、その中で展示・運営協力会会員が実験・工作教室を実施することの有効性として以下のことがあげられる。

実験・工作教室

(1)各会員が専門とする分野の実験や工作を行うことで、参加者にとって魅力のある様々な種類の実験・工作教室が期待できる。7月上旬に配布する展示・運営協力会のチラシの中から、参加者自身が興味・関心のあるものを選択して参加することができると同時に、「楽しい」、「満足した」と感じた参加者はリピーターとなるケースが多い。

(2)内容はそのほとんどが工作で、作ったものを持ち帰ることができ、参加費は保険料の50円だけを徴収する。紙などの消耗品、実験器具などは当館で用意するが、その他必要な物品は原則として各会員が準備する。内容は勿論のこと、とても高額な材料を用意する場合もあり期待感が高い。また、小学生だけのグループでも50円を持っていれば参加できるという気軽さもある。

(3)休日や学校の長期休業中は、常設展示だけでなくイベントや実験・工作教室のニーズが特に高い。館主催で実験・工作教室を毎週土日、或いは夏休み中に毎日実施するのには人的な面や予算の面でも限界があり、展示・運営協力会と連携することで回数を大幅に増やすことができる。

実験・工作教室

(4)展示・運営協力会設立当時から協力してくれている会員が多く、県内にある企業や大学、研究所が県立の当館と連携して、「地域の子どもの育成」という観点から千葉県に貢献することができる。

次に当館の役割として以下のことがあげられる。

(1)会員に対して、3月に展示会、特設コーナー展示、実験・工作教室、サイエンスショーの実施の可否についてアンケート調査を実施し、4月初旬に集約する。実験・工作教室、サイエンスショー実施希望会員に対して、5月上旬を目途に、実施希望日、内容等を決定してもらう。6月上旬までに調整を行いチラシを作成。7月～2月の期間で実施となる。

(2)最も重要な役割は参加希望者を集めることである。事前にどれだけ広報したかで、参加希望者の人数は大きく変わる。チラシの配布、ホームページへの掲載、館内ポスターの掲示など、様々な手法を使うが、なかでもチラシの配布は効果が高い。始めに作成するチラシは、年間を通して行われる

実験・工作教室、サイエンスショーの日程、内容をすべて記載し、県内すべての小、中学校に7月に配布する。夏休み中は、チラシを見て来館する参加者が多いが、11月にはその効果がほとんどないため、再度、近隣の小学校にチラシを配布した。

(3)借用希望の器具や必要な消耗品を事前にあげてもらい物品の確認、購入をする。実施日の1週間前ぐらいに最終の打ち合わせを行い、安全面の配慮や時間配分の確認、材料の準備等を行う。大学生が講師になる場合には、内容に関しての助言も行った。当日は、館の職員が、準備、受付、講師の紹介、工作の補助等を行っている。

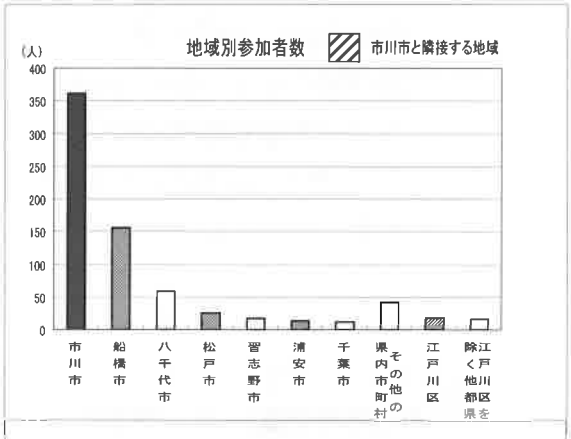
4「展示・運営協力会」との連携の課題

「展示・運営協力会」がそれぞれの特色を生かして行う実験・工作教室は魅力に溢れている。そして、その魅力を十分に引き出すことが館の役割である。

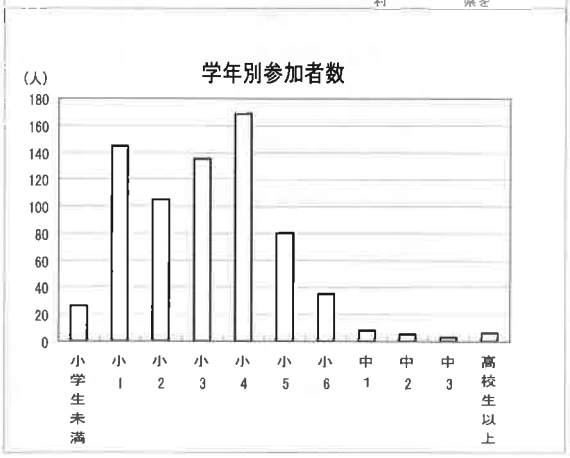
そのためには、

(1)たくさんの子ども達に参加してもらうために、広報の方法、時期を熟考する必要がある。

地域別参加者数を見ると、当館の位置する市川市と隣接する船橋市からの参加者で、全体の71.5%を占めている。その中でも徒歩圏内の小学校からの参加者が圧倒的に多い。即ち、近隣の小学生が多く参加し、更に同じ子どもが何回も参加していることになる。現状でよいのか、県内各地から「たくさんの子ども」に参加してもらうことがよいのか十分に検討し、広報の手段を考えなければならない。



また、学年別参加者数に目を向けると小学1～4年生の参加者が、全体の76.7%を占めている。多くの実験・工作教室がその条件に3年生以下は保護者同伴としているため、圧倒的に親子での参加が多い。ただし、高学年向けに設定されている実験・工作教室にも低学年の児童が多く参加しているのが現状であり、このことも今後の検討課題である。



(2)(1)とも関連するが、参加申し込みの方法についても検討する必要がある。現在は、実験・工作教室があることを知らないで来館した子ども達にも対応できるよう基本的には当日受付の形態をとっている。ただ、この形態では定員を超えてしまった場合、抽選となり参加できないこともある。このことが、県内遠方からの参加にマイナスとなっている可能性もあり、事前申し込みを含めた検討が必要である。

(3)抽選になってしまった場合、抽選にはずれた子ども達が家でも作ることができるよう作り方の説明や展開図等、配布できるものをできる限り用意する。

(4)館と展示・運営協力会各会員の連携だけではなく、各会員同士が連携した活動の方向性を探る必要がある。

房総のむらにおける親子参加型体験事業
－子どもから親子へ－

千葉県立房総のむら
広報・普及グループ長　神野　信

1　親子参加型体験事業＝「子ども縁日」・「むらの寺子屋」

当初目的：子どもの居場所をつくる・・・房総のむらの立地条件などから実際の来館者の多くは親子(子どもだけで来館しない)

目的変更：親子で参加できる体験事業・・・「子ども縁日」・「むらの寺子屋」

2　「子ども縁日」：毎月第３日曜日に開催(7 月･8 月を除く)

「作って遊ぶ」をテーマ

① 昔なつかしいおもちゃを作る・・・保護者・大人も参加可能

② 身近な素材(紙や竹など)を使う・・・自宅でも作って遊ぶことができる

③ 手慣れた指導者による過不足のない技術指導・・・保護者の参加を促す

実施演目例(平成 22 年度)

紙芝居・昔語り・紙でつくる鯉のぼり・和太鼓演奏・鳥凧つくり・竹の水鉄砲・豆鉄砲・紙トンボ・紙でつくる鳥

3　「むらの寺子屋」：年４回開催(不定期)

本来は館内職員・外部講師による歴史・文化についての講義形式で開催・・・文化・歴史に関心を持つ個人を対象

平成 22 年度から、親子・家族での参加を可能にするため、体験しながら江戸庶民文化への理解を深める形式に変更・・・来館者の年齢・構成に合わせた変更

実施演目例(平成 22 年度)

大道芸・・・南京玉すだれ・皿まわし(江戸庶民文化の流れをくむ大道芸)

ことば遊び・・・「じゅげむ」など

平成２３年度以降は、「おもしろ講座」として開催

4　問題と課題

① 体験博物館・房総のむらの諸事業の中で、どのような位置付け・特徴付けを行うのか。

② 開催場所・担当人員の確保・・・「隙間産業」的運営の限界

③ ボランティア・地域団体との連携

鳥凧つくり

豆鉄砲

子ども縁日

皿まわし

南京玉すだれ

ことばあそび

むらの寺子屋

武蔵野えどまる団～たてもの園居場所づくり大作戦～の活動

江戸東京たてもの園
学芸員　髙橋英久

1　事業実施の経緯

江戸東京たてもの園における武蔵野えどまる団の活動は平成16年10月より始まりました。そのきっかけは、文部科学省により平成16年度から実施された「地域子ども教室推進事業」に因るものです。この地域子ども教室推進事業は、昨今の子どもをめぐる状況の中で子どもたちが安全にかつ楽しく活動を展開できる場を地域全体で整備していこうというものであり、そのために文部科学省が3年間という期限付きで活動資金も含めバックアップをするというものでした。当園ではこの趣旨に賛同し、特色ある事業を展開し、3年を過ぎて現在まで活動を継続しました。

2　たてもの園の取り組み- キーワードは「遊び」と「地域連携」

当園では、この「地域子ども教室推進事業」を『武蔵野えどまる団』と称しています。当園を舞台にして、子どもたちがドキドキワクワクするような居場所を作ることを目的としています。このネーミングは子どもたちに受け入れられるよう、また団体としての結束力をイメージさせるよう考慮したものです。

武蔵野えどまる団の活動を展開するうえで重要なキーワードが2つあります。一つは《遊び》を媒介にして活動を展開するということ。私たちは、年齢や地域を越えた不特定多数の子どもたちが集まって楽しく場を共有するための有効な手段として〈遊び〉を軸に活動を展開しようと考えました。そしてここでの遊びとは、たてもの園ならではの昔の遊びや自然素材を用いた屋外での遊びになります。そういった遊びのなかで、驚きや発見を得たり、社会性や自立性、痛みや優しさを体得して欲しいと願っています。時代や場所は異なりますが、かつて私たちが経験した遊びの醍醐味を現代の子どもたちにも伝えられればと思っています。

もう一つ重要なキーワードは《地域連携》。本事業は上記の趣旨を地域のみなさんとともに行っていくことに意義があると考えています。かつての地域社会では、子どもたちは地域の多くの人たちとの関係性のなかで育まれていました。えどまる団の活動を通じ、より多くの大人が子どもたちと接点を持てれば、愛をたくさん分け与えられた子どもたちが育っていくのではないかと考えています。また私たちも現在、子どもと向き合うことの難しさを痛切に感じています。様々な方からご助言・ご指摘をいただき、より良い活動を目指していきたいと考えています。

落ち葉プール

けんちく体操

運動会つなひき

3　博物館における活動の意義

武蔵野えどまる団の活動は一年を通し、月に１回土日に園内の空地で行っています。その内容は多彩であり、おもちゃ交換会やサッカー、大カルタ大会、盆踊りなどです。なかでも特に人気なのが、チャンバラ大会、水鉄砲大会といった激しい遊びです。貴重な資料を保存・展示しかつ安心・安全な場である施設としての博物館というあり方はとても重要だと考えますが、また一方で年代を越えたコミュニケーションを遊びを媒介にして体感することも歴史系博物館が持つ社会的意義の一つであると考えます。

大カルタ大会

チャンバラ大会

おもちゃ交換会

サッカー

4　今後の展望－ えどまる団の野望

居場所とは言葉を変えれば心の拠り所ということなのでしょう。それは誰にとっても必要なもので、その場所の存在が人の心を豊かにするものでしょう。えどまる団は、多くの子どもたちにとってそんな居場所をつくるきっかけになることを使命としています。

子どもの遊びは大人が準備するものではないはずです。子どもたちの社会の中で自由な発想のもと、遊びを作り出していくことが本来の遊びなのではないでしょうか。いつかは子どもをスタッフに取り入れたい。そしていつかは子ども自身が団長となって欲しいと思っています。

こどもに夢を　大人には新しい発見を

八王子市こども科学館
主査　森　融

八王子市こども科学館（愛称：サイエンスドーム八王子）は、主として子どもたちに、プラネタリウムを通して天文や宇宙についての学習の機会を、また基礎物理を中心とした展示物を操作することにより科学の原理や応用について、さらに各種の科学教室の開催により自ら科学を体験し、学習する機会を提供する場として、平成元年1月28日に開館しました。

1階は基礎物理の法則をもとにした展示物。地球の自転を体験する「まわる広場」、電磁石で金属球を加速する「電気コマネズミ」、波の伝わり方を見る「バネミミズ」などがあります。

2階は映像や鏡を使った展示があり、画面の中の惑星の画像を動かすことができる「惑星と遊ぼう」やモニターの前に立つと宇宙服を着た自分が映る「宇宙飛行士に変身」、「万華鏡の世界」などがあります。また八王子の動物、野鳥、近くの浅川河川敷から発掘された約230万年前のゾウ・ステゴドンの牙と歯の化石（レプリカ）の展示や、大型液晶ビジョンを備えたオリエンテーションホール、図書コーナー、パソコン室、電子顕微鏡室、会議室があります。

1階の展示物は、開館以来更新していないものが多く老朽化しており、更新が当館の最大の課題となっています。

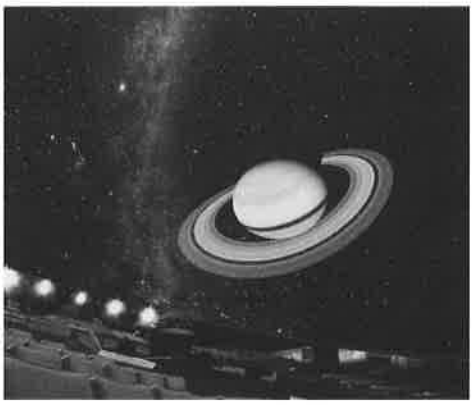
3階は星空観望広場で、星空観望会、昼間の天体観望会等を開催しています。

地下1階には科学工作室があり「科学工作教室」、リサイクル材料を使う「かんたん工作室」、割りばしや輪ゴムなど身近な材料を使う「フリー工作広場」、「科学実験ショー」などを開催しています。

屋外には地下鉄丸ノ内線の先頭車両1台を設置し公開しており、幼稚園・保育園などの団体の昼食場所としても人気です。

平成20年3月にリニューアルしたプラネタリウムは最新型の光学式とデジタル式の統合型プラネタリウムです。銀河系内の恒星や銀河系外の天体までの距離等をデータベース化し、映像として投映できる「デジタル・ユニバース」を搭載しており、宇宙の果てまでの映像の投映が可能です。

デジタル式プラネタリウムは、6台のプロジェクターで、フルスペックハイビジョンの4倍を超える高画質4Kサイズ（縦横ともに4000ピクセル）で、高精細で明るく美しい映像を投映することができます。



直径が21mのドームスクリーン一杯に迫力ある動画が映される全天周映像番組は好評です。ドームスクリーンが大きいため、自分が映像の中にいるような臨場感、没入感が得られ、立体映像に見えてくるほどです。

プラネタリウム番組は、生解説とオート番組を組み合わせて投影しています。八王子の夕焼けから始まる生解説は、わかりやすいと喜ばれています。

またプラネタリウムでは、理科の学習指導要領に則った学習番組（小学校3年生・4年生・6年生、中

学校３年生)、また幼稚園・保育園向けに幼児番組も投影しており、当館の主要な事業の一つです。

小学校４年生と中学校３年生は開館当初より、送迎バスの予算を科学館で措置しており、現在も４年生は市内70校全校が来館しています。学習指導要領の改訂で小学校６年生に月の単元が加わることになったため、平成23年度からは６年生用バスの予算を措置しました。

学校との連携は、プラネタリウム見学以外に、総合的学習、職場体験、職場訪問の受け入れ、学校への出前講座があり、当館の事業でも重要な位置を占めています。

一方、一般来館者への普及活動では、一般向けプラネタリウムは、全天周映像番組を３カ月ごと更新しており、集客に対して大きな要素となっています。新番組が始まると来ていただけるリピーターの方も多くなっています。

講座等は、先述のとおり様々な内容で、土曜・日曜・祝日には何らかの講座を開催しており、さらに講演会や星空観望会・天文現象に合わせた学習会、プラネタリウムでの星空コンサートなど、当館の体制で可能な限りの様々な内容を開催しています。

また、広報活動は普及活動とともに重要と考えており、市直営館で広報の予算が無いなかで、さまざまな情報発信に取り組んでいます。

ホームページでの広報とともに最も集客に効果を上げているものは、学校を通じて市内の小学生全員に配布するパンフレット類です。プラネタリウム番組のパンフレット（年４回）と毎月の催し物のチラシを小学生全員に配布しています。これらは時に、幼稚園・保育園、中学生、市外の小学校まで配布します。チラシ配布の効果により、年間６回の星空コンサートは、毎回ほぼ満席になります。これら広報活動により当館のことを認識していただいていることは、ホームページの閲覧数にもあらわれ、週末前になると閲覧数が多くなります。

プラネタリウムでの３カ月ごとの新番組と様々な講座、積極的な広報活動により、プラネタリウムのリニューアル後は順調に、毎年来館者が増えています。

開館から23年を経て感じることは、開館当初は来館者や工作教室等の参加者は小学校高学年が多かったのですが、現在は、小学校低学年や未就学児の親子連れが多くなってきており、工作教室の参加希望も低学年が多くなっています。これは、平成以降の子どもを取り巻く社会情勢の変化や小さなお子さんを連れたお父さんお母さんが外出しやすい施策などのためと考えています。

科学実験ショーでは、小さなお子さんに現象を見ていただくことはできても、原理を正しく理解してもらうことは非常に難しいことです。かえって、同伴のお父さんお母さんのほうが「良くわかった。」と好評をいただいています。お子さんについては、その場ではわからないとしても、親子で体験していただいた現象や原理をもとに、生活のさまざまな場面で話し合っていただければと考えています。

こうして考えてみると、「こども科学館」という名称で、対象が「こども」のように思えますが、実際の参加は「親子」となってきており、講座での説明なども親子を意識した内容が必要となってきていると思います。

「子どもたちのためにできること」当館では、来館者の年齢やニーズに合わせた様々な講座を開催していくことと学校等との連携による普及活動と考えています。

平成２２年度実施　加盟館対象　子ども対応アンケート調査　アンケート用紙

千葉県博物館協会加盟館園　各位

平成２２年１２月１日
千葉県博物館協会調査研究委員会
東京都三多摩公立博物館協議会企画委員会

千葉県博物館協会・東京都三多摩公立博物館協議会　共同調査アンケートについて

時下、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、千葉県博物館協会調査研究委員会、および東京都三多摩公立博物館協議会企画委員会では、平成２２年の合同でテーマとして「博物館が地域にできること～子ども達のために～」を設定し、共同で情報把握をするはこびとなりました。

つきましては、まず両会加盟の博物館・資料館・美術館等に対しまして、学校対応（子ども対応を含む）の教育普及プログラムの内容等について情報を収集致したく、アンケートへのご協力をお願いするものです。

子ども（学校）を対象とした具体的な取り組みを集約し、東京都三多摩地区並びに千葉県下の博物館等で行われている様々なプログラムを調査するとともに、その成果を子ども（学校）対応の事例集として、各館で活用できるよう両会で資料化することを考えております。以上、調査の趣旨をご理解頂き、ご多忙のところ恐縮ですが、以下の質問に対しご回答下されば幸いです。

〔備考〕
※質問における「子ども」とは、原則中学生以下を指します。
※アンケートにおけるお問い合わせは、八千代市立郷土博物館　佐藤まで。
　電話：047－484－9011
※県博協では、事務連絡の都合上、貴館に連絡のとれるメールアドレスの掌握に努めています。該当するアドレスがございましたら、回答欄へのご記入をお願いいたします。

誠に恐れ入りますが、集計作業の都合上、下記までにFAXにてご返送下さい。カガミは必要ありません。

返信先：芝山古墳・はにわ博物館　FAX：0479－77－2969

ご回答期限：平成22年12月19日（日）

千葉県博物館協会・東京都三多摩公立博物館協議会　共同調査アンケート

〔子ども（学校）対応についてのアンケート〕

1　館園名：［　　］
2　電　話：［　　］
　メール：［　　］
　ご回答者：［　　］
3　ホームページの有無　　有　・　無
　①　館独自のホームページがありますか？　　有　・　無
　②　展示会以外の事業について詳細情報を掲載していますか？　　有　・　無

4「教育普及担当専門の職員がいますか？　　有　・　無

5　子ども（■中学生以下　以下同）を対象とした、展示はありますか。　　有　・　無
　①「有」とお答えの場合、どのような展示か具体的に教えて下さい。

6　常設展示の解説パネルや、解説シート等、子ども向けのものを別に作成していますか。
　はい　・　いいえ

　①「はい」と お答えの館にお尋ねします。それらを作成するときに、工夫していることや、配慮していることなどがありましたら、教えて下さい。

7　「年間事業予定」の中に、子どもを対象とした講座等はありますか。

有　・　無

①「有」とお答えの館にお尋ねします。どのような事業か、具体的に教えて下さい。

講　座　名	講座の内容・PRポイント・参加費用

② 出前講座等、学校等の依頼により適宜行っている子供たち対象の講座、メニューを用意していますか　　有　・　無

「有」とお答えの館にお尋ねします。どのような事業か、具体的に教えて下さい。

講　座　名	講座の内容・PRポイント・参加費用

8　年間の小・中学校の団体対応についてお尋ねします。

年間学校受け入れ総数　（　　）件　　利用児童生徒延べ人数（　　）人

9　学校訪問、パンフレット配布等、館（地域）で行う講座等の事業を小・中学校教員、児童生徒等を対象として具体的にアピールするための手段がありますか。

有　・　無

①　「ある」とお答えの館にお尋ねします。具体的にどのような活動を行っていますか。

10　館（地域）に、小・中学校教員がメンバーとなっている博物館運営推進のための組織がありますか。（博物館協議会を除く）　　ある　・　ない

①　「ある」とお答えの館にお尋ねします。その組織により、地域の学校との連携が促進されたり、館の利用が増えたりしていますか。　　**はい　・　いいえ**

②組織について、その具体的な活動状況などを教えて下さい。

11　最後に学校や子どもの博物館利用について、ご意見・ご提案などあればお願いします。

お忙しい中、ご回答ありがとうございました。FAXにてこのままご返送下さい。

千葉県博物館協会アンケート集計結果から見る傾向と課題

調査研究委員会

研究テーマ「博物館が地域にできること」～子ども達のために～

上記の研究テーマに基づき、千葉県内の協会加盟館にアンケートを実施し、各館・園に於ける「子ども（学校）対応」の実態について調査した。加盟館の内、約６３％の館にあたる５０館から回答を得たので、その結果から得られた傾向と課題についてまとめた。

1. 子ども（学校）対応のできる職員の不足

大規模館はともかくとして、加盟館の大部分は学芸職員が３名以下の館が多い。研究職として専念できる館は希で、教育普及と研究の両立ができなければ中小規模の博物館・美術館等ではやっていけない。また、教員免許所持者など子ども対応が上手で教育熱心な職員がいないと、学校対応が充実しない実態が見える。キュレイターとエデュケーターの両者が、博物館・美術館には必要不可欠である。そのためには、すべての学芸職員が子ども対応能力の向上を図る必要があり、そのための研修等も必要であろう。これは、博物館・美術館を統括する教育委員会や文化庁、そして博物館協会の大きな課題でもある。

しかしこのことは外部だけに頼らず、実践的な館内研修・個人研修を計画的に行い、日常から職員の資質向上を意識的に進めていく気概が、館内の雰囲気としてなくてはならないと感じる。

2. 対応の遅れている子ども向け展示・解説

展示解説は、大人でも難しい内容のものが未だに多く、専門用語や難読漢字などは子どもにとってはお手上げの状態である。ルビをふるなど各館とも努力はしているが、子ども専用の解説パネル等を用意している館は僅かである。展示理解を深めるための補助教材として、子ども向けワークシート等による対応もあるが、幼・小（低学年版・高学年版）・中学校と、子どもの発達段階に応じたワークシートを用意している館は殆どない。学校利用の促進を図るためにも、今後は解説パネルやワークシートの作成などにおいては、よりきめ細やかな対応を行う必要がある。また、触れたり、体験したりできる展示や、映像や音声による展示など、子どもの五感に訴える展示が、これからの子ども向け展示としての主流になりつつある。

3. 学芸員が学校の良きパートナーとなる必要性

博学連携が叫ばれてから久しいが、アンケートの実態を見るとまだまだという感は否めない。その要因は、先生方と学芸員のコミュニケーション不足と、学校受け入れ態勢の不備である。これらを解決するためには、特に小学校の中・高学年の先生方が考える、授業において博物館が果たせる役割（ニーズ）を、学芸員はアンテナを高くして受け止める必要がある。そのためにも、定期的に教師と学芸員が膝を交えて話す場を設定することは、博学連携を円滑に進める重要なポイントである。また学芸員と言えども、小学校の学習指導要領の中身を学ぶ必要があり、教師と学芸員が共に研修する場があっても良いのではないか。学校の教育内容は、学習指導要領を基に組み立てられており、学芸員がこれからの教育の方向性を理解することは、連携をさらに進めた博学融合を目指す上でも極めて重要である。アンケートに多く見えるチラシやポスターの学校配布も効果的だが、そこに「人」の介入が常にあることが今後は大切になるだろう。

千葉県博物館協会内アンケート集計結果（平成２２年度実施）

※回答の一部は別紙にて記載

1. **回答館園数：**　［ 加盟７９館中　５０館］
   ※但し、一部回答の無い項目のある館も有り　　※加盟館は別紙一覧参照

2. ※この項目は事務的内容のため回答は削除

3. **ホームページの有無**　　有（４８）　・　無（２）
   ① 館独自のホームページがありますか？
   有（３９）　・　無（９）
   ② 展示会以外の事業について詳細情報を掲載していますか？
   有（４０）　・　無（８）

4. **「教育普及担当専門の職員がいますか？**
   有（１２）　・　無（３８）

5. **子ども（■中学生以下　以下同）を対象とした、展示はありますか。**
   有（２０）・無（２２）
   ①どのような展示か具体的に教えて下さい。**（別紙１参照）**

6. **常設展示の解説パネルや、解説シート等、子ども向けのものを別に作成していますか。**
   はい（１７）　・　いいえ（３３）
   ① それらを作成するときに、工夫していることや、配慮していることなどがありましたら、教えて下さい。
   （別紙２参照）

7. **「年間事業予定」の中に、子どもを対象とした講座等はありますか。**
   有（２５）　・　無（７）
   ① どのような事業か具体的に教えて下さい。**（別紙３参照）**
   ② 出前講座等、学校等の依頼により適宜行っている子供たち対象の講座、メニューを用意していますか
   有（３６）　・　無（１４）
   どのような事業か、具体的に教えて下さい。**（別紙４参照）**

8. **年間の小・中学校の団体対応についてお尋ねします。**（館名は略称　回答のあった館のみ）
   ・千葉市美術館
   年間学校受け入れ総数 25件　利用児童生徒延べ人数　約1,200人
   ・鴨川シーワールド
   年間学校受け入れ総数 約700件　利用児童生徒延べ人数　約40,000人
   ・千葉市郷土博
   年間学校受け入れ総数 5件　利用児童生徒延べ人数　359人
   ・浦安市郷土博
   年間学校受け入れ総数 83件　利用児童生徒延べ人数　5,719人
   ・市川考古博
   年間学校受け入れ総数 41件　利用児童生徒延べ人数　3,367人
   ・市川歴博
   年間学校受け入れ総数 42件　利用児童生徒延べ人数　3,882人

・市川自然博
　年間学校受け入れ総数50件　利用児童生徒延べ人数　4,311人
・県立中央博
　年間学校受け入れ総数 112件　利用児童生徒延べ人数　9,346人
・県立美術館
　年間学校受け入れ総数25件　利用児童生徒延べ人数　922人
・房総のむら
　年間学校受け入れ総数493件　利用児童生徒延べ人数34,072人
・千葉市科学館
　年間学校受け入れ総数365件　利用児童生徒延べ人数　42,103人
・国立歴史民俗博物館
　年間学校受け入れ総数382件　利用児童生徒延べ人数　22,300人
・船橋市郷土資料館
　年間学校受け入れ総数8件　利用児童生徒延べ人数 957人
・県立現代産業科学館
　年間学校受け入れ総数 82件　利用児童生徒延べ人数　6,343人
・ふなばしアンデルセン
　年間学校受け入れ総数 139件　利用児童生徒延べ人数　8,348人
・流山市博
　年間学校受け入れ総数 14件　利用児童生徒延べ人数　1,332人
・千葉市加曽利博
　年間学校受け入れ総数 94件　利用児童生徒延べ人数　6,688人
・睦沢町歴民
　年間学校受け入れ総数 13件　利用児童生徒延べ人数　462人
・和洋女子大
　年間学校受け入れ総数 5件　利用児童生徒延べ人数　約700人
・ＴＥＰＣＯ
　年間学校受け入れ総数 約300件　利用児童生徒延べ人数　約16,000人
・茂原市美・資料館
　年間学校受け入れ総数 9件　利用児童生徒延べ人数　274人
・芝山町立はにわ博
　年間学校受け入れ総数 17件　利用児童生徒延べ人数　858人
・八千代市博
　年間学校受け入れ総数　22件　利用児童生徒延べ人数　1,720人
・松戸市博
　年間学校受け入れ総数　49件　利用児童生徒延べ人数　4,660人
・成田羊羹博
　年間学校受け入れ総数　0件　利用児童生徒延べ人数　0人
・白浜海洋美
　年間学校受け入れ総数　0件　利用児童生徒延べ人数　0人
・伊能忠敬記念
　年間学校受け入れ総数　不明　利用児童生徒延べ人数　7,699人
・川村記念美
　年間学校受け入れ総数　29件　利用児童生徒延べ人数　3,312人
・稲毛民間航空記念

年間学校受け入れ総数　8件　利用児童生徒延べ人数　323人

・我孫子市鳥博

年間学校受け入れ総数　35件　利用児童生徒延べ人数　3,242人

・山武市歴民

年間学校受け入れ総数　21件　利用児童生徒延べ人数　979人

・鴨川市資

年間学校受け入れ総数　20件　利用児童生徒延べ人数　285人

・袖ヶ浦市博

年間学校受け入れ総数　22件　利用児童生徒延べ人数　1,720人

・鎌ヶ谷市資

年間学校受け入れ総数　7件　利用児童生徒延べ人数　511人

・船橋市飛ノ台博

年間学校受け入れ総数　25件　利用児童生徒延べ人数　1,894人

・市原市水と彫刻

年間学校受け入れ総数　14件　利用児童生徒延べ人数　877人

・館山市博

年間学校受け入れ総数　24件　利用児童生徒延べ人数　870人

・大原幽学記念

年間学校受け入れ総数　15件　利用児童生徒延べ人数　578人

・県立関宿城博

年間学校受け入れ総数　21件　利用児童生徒延べ人数　1,452人

・市川市芳澤ガーデン

年間学校受け入れ総数　4件　利用児童生徒延べ人数　約200人

・君津市久留里城址博

年間学校受け入れ総数　15件　利用児童生徒延べ人数　820人

9. **学校訪問、パンフレット配布等、館（地域）で行う講座等の事業を小・中学校教員、児童生徒等を対象として具体的にアピールするための手段がありますか。**

有（３５）　・　無（１５）

①具体的にどのような活動を行っていますか。**（別紙５参照）**

10. **館（地域）に、小・中学校教員がメンバーとなっている博物館運営推進のための組織がありますか。（博物館協議会を除く）**　　ある（７）・ない（４２）

①「ある」とお答えの館にお尋ねします。その組織により、地域の学校との連携が促進されたり、館の利用が増えたりしていますか。　　はい（２）・いいえ（２）

②組織について、その具体的な活動状況などを教えて下さい。**（別紙６参照）**

11. **意見等（別紙７参照）**

【別紙１】　５　子ども（■中学生以下　以下同）を対象とした、展示はありますか。

- 常設展示されているテーマ展示室には、小学校3･4年生で学習する昔の浦安についての展示がある。埋め立てられる前の干潟のジオラマや海苔漁の道具の展示、漁業で使う網や貝むきについての展示もされている。展示室内の「海の映画館」では昔の浦安の漁業についてのことなどを放映している。(浦安郷土博)
- 昭和27年当時を再現した屋外展示場には、昔の浦安の家屋を移築し、そこで昔遊びやべか舟乗船など、季節に応じたさまざまな体験活動をボランティア「もやいの会」の協力により行っている。屋外展示場では、小学3年生が「昔のくらし体験」を行ったり、小学4年生が「海苔すき体験」を行う。週末には昔ながらの住宅で駄菓子を販売したり、おはなし会を行っている。（浦安郷土博）
- 子どものみを対象とした展示は行っていないが、夏休み期間中など、小中学生や親子連れなどにも親しみやすい企画を用意している。
  ＊　例：所蔵作品によるテーマ展示「現代美術の夏休み」（2009年度夏）（千葉市美術館）
- 生物の模型など観覧者がアクションを加えることでそれに対するリアクションが返ってくるなど、子供が参加しやすい遊具的な展示を設置している。（鴨川シーワールド）
- タッチパネルでクイズや映像などを閲覧できるPC端末を設置している。内容は子供を意識した構成である。（鴨川シーワールド）
- 小型生物タッチプール（鴨川シーワールド）
- 常設展示には、堀之内貝塚に暮らす人々の様子をジオラマで表現したコーナーがあり、小学校6年生向けの「縄文体験学習」では、コククジラの骨など、他の展示品と併せて効果的に活用している。（市川考古学）
- 常設展示には特にないが、小学校3･4年生向けの「昔のくらし」に関する資料の展示を、体験学習と抱き合わせ事業として行っている。昭和30年前後の衣食住に加えて、国語の教材に併せた戦時下の資料や灯りの体験に併せた資料も展示している。例年秋に行っているが、当館の企画展や学校の単元の実施時期も勘案しながら行っている。（市川歴博）
- 地域に生息する水生動物や昆虫等の飼育展示（市川自然博）
- 触ったり、遊ぶことを取り入れた体験展示（市川自然博）
  土をしらべてみよう 5種類の土のプレパラートを実態顕微鏡で観察
  どんぐりごま　　コナラやクヌギで作成した独楽で遊ぶ
  トビハゼとんとん相撲　　トビハゼの形をした紙相撲で印象を強める
  ひっつき虫　　オナモミの果実を様々な素材の布につける
- 鳴き声展示（市川自然博）
  野の鳥、水辺の鳥、昆虫、カエルの鳴き声をクイズ形式で楽しむ
- 釣りゲーム（市川自然博）
  幼児向けに、ザリガニ、モツゴ、ナマズの餌の紐を引き、釣り当てる
- 展示パネルの解説文にルビを振り、展示台は幼児の目の高さに設定（市川自然博）
- 実際にモノにさわれる体験学習室（たいけんのもり）という展示室がある。
  シカの毛皮や骨格標本や土器などをさわることができる他、体験を通じて学習できる工夫あり。(県立中央博)
- 千代紙ろうそく作りや畳のコー･スターなど小さなお子さんでも楽しめる体験メニュー　を多数用意。さらに学校等団体向けの団体体験メニューも用意。（房総のむら）
- 学校団体には、児童が自ら発見することができるワークシートを配布している。（房総のむら）
- 夏休み中に、コレクション展示のひとつとして『こどものための展覧会 ―空の表現―』を開催。絵画作品の中に見る様々な“空”の表現方法を、こどもにもわかりやすい解説　パネルとともに展示。（県立美術館）
- ほぼ全ての展示物が、子どもから大人まで楽しむことができるように作られている体験型の展示物。展示物は140ほどあるため詳述はできませんが、音・光・数と形・視覚感覚・技術・宇宙・環境・自然・自分、などをテーマにした展示がある。（千葉市科学館）

- 子ども対象と限定していないが、常設展示「近世」内に「寺子屋れきはく」というスペースがある。体験を通じて、江戸時代のこどもたちのまなびや遊びを知ることができる。デザインは寺子屋を意識しており、文机（複製）・手習い本（複製）を使い、文字を学　んだり、双六などで遊ぶことができる。ボランティアスタッフと交流しながら、当時の子どもたちの様子を想像することができる。周囲には、寺子屋の歴史を紹介したパネル　や、手習い本の実物資料を展示している。（国立歴史民俗博物館）
- 小企画展「くらしの道具 - 道具が語るくらしの歴史 - 」を開催。小学校４年生の学習する「昔のくらし」にあわせて、生活用具資料を展示。（船橋市郷土資料館）
- 本館は大きく３つのフロアに分かれ、どのフロアも子どもにもわかりやすい展示となっている。特に「創造の広場」のフロアに、「ガリバーのシャボン玉」、「ウォーターロケット」、「スイングクロック」など、小さな子ども向けの常設展示が多数ある。（現代産業）
- 企画展１　谷川　寛のワンダーブック　企画展２　開発良明の案出泉展
  企画展３　菱山裕子のファンタジーワールド
  企画展４　笹田　類のふあっとキラッと春よ来い（以上アンデルセン）
- ミニ企画展（４～５月）「縄文体験壁新聞展　私たちの縄文体験」
  地元小学校５年生が授業の一環として行った縄文体験について壁新聞にまとめたものを展示
  ミニ企画展（７～８月）「夏休み加曽利貝塚縄文ひろば　楽しい縄文たいけん」
  夏休みに合わせ、縄文時代の土器づくりや石器づくり、火おこし、編み物など当時の技術を紹介（以上加曽利）
- 学芸員課程の館務実習で毎年開催する民具展は子どもが楽しめる展示
  ハンズオン展示を多数用意、団体見学には学生が展示解説を行う（和洋）
- 館内展示内容が小学校４・５年生を対象としている（ＴＥＰＣＯ）
- 常設展示の解説文は、キャラクターによるマンガとなっている（芝山古墳はにわ博）
- 「昔の暮らし」では、手にとって資料に直接触れられるコーナーを作っている。
  「関宿城写生コンクール」を開催し、入選作を展示している。（関宿城博）
- 縄文土器ジグソーパズル（電磁石付き）を設置し、時間制限付きで復元作業を疑似体験させる。（館山市博）
- 「昔のくらし探検」展示を設け、７０～８０年前の農家の展示を季節展示として行っている。（松戸市博）
- 「昭和の暮らし」展示を設け、小学校３～４年生の社会科や生活科の単元に沿うような当時の生活空間を再現している。

  トウミや石臼、縄文土器の破片、昔の遊び道具（ガリガリとんぼ・カエル・セミ等）など、触れたり遊んだりできるスペースを設けている。（八千代市博）

【別紙２】６ 常設展示の解説パネルや解説シート等、子ども向けのものを別に作成していますか。

「はい」と お答えの館にお尋ねします。それらを作成するときに、工夫していることや、配慮していることなどがありましたら、教えて下さい。

- 一部の資料についてこども解説パネルを設置。展示テーマの解説ではなく、資料そのものについてや、読み解きのヒントを記載している。資料をじっくり見る行動を促すために、疑問を投げかけたりする場合もある。子どもの目線で気づくことなども紹介している。制作途中には、言葉遣いや言い回しにわかりにくいところがないか、小学校５年生 ・６年生にモニター調査を行った上で、作成。（国立歴史民俗博物館）
- 常設展示のパネルや説明文のレベルは中学生を想定。別途子ども用のパンフレットを作成して見どころなどを説明している。子ども向けとしては来年度の設置に向けて準備中である。（県立中央博）
- 「現代産業の歴史」のフロアでは、子ども向けに「すごろく探検シート」を作って、問題を解きながら見学できるようにしている。（現代産業）
- 解説シートは子ども向けに別に作成しているわけではないが、ふりがなをふるようにしている。（現代産業）
- 博物館のキャラクター「あっさりくん」を印刷物やグッズなど様々な場面で利用し、子どもたちに親しみを持ってもらえるようにしている。（浦安郷土博）
- 「見て、ふれて、感じて 浦安市郷土博物館」という児童用解説書で、イラストやQ＆Aなどをまじえて、わかりやすく展示についての解説をしている。（浦安郷土博）
- 「Q＆A 幻の魚にチャレンジ」というタッチパネルの画面でクイズが出来るコーナーがあり、昔の浦安について楽しく学習できるようになっている。（浦安郷土博）
- 音声ｶﾞｲﾄﾞの端末を受付で貸し出しており、各展示場所で標準語と浦安の方言のどちらかを選んで解説を聞くことができる。（浦安郷土博）
- 毎回ではないが、中学生のためのセルフガイドや、小学生のための鑑賞ツール（カード）などを、企画展にあわせて制作する。（当館では、常設展示はなく、所蔵作品のテーマを決めて、企画展の会期にあわせて展示している。）（千葉市美術館）
- ツールが個々の鑑賞体験を妨げないことと、対象年齢を明確にすることを心がけている。（千葉市美術館）
- クイズやパズルなど子供が参加しやすいゲーム性の高いパネルを作製している。（鴨川シーワールド）
- 展示の順にしたがって解説書を作成している。（市川考古学）（市川歴博）
  要望があればできるだけ個々の児童・生徒の手に渡るように配布している。
- 「昔の暮らし探検」展示では、出来るだけ体験できたり、触れたりできる資料を配置したり、インストラクターによる使い方の指導や、友の会ボランティアによる、毎週土曜日開催の「水桶担ぎ体験」「風呂敷体験」を行っている。（松戸市博）
- 館オリジナルの小学生向け「博物館学習ノート」を作成・配布して、子ども達がこのノートを利用して博物館での学習がスムーズに行くように配慮している。（船橋市飛ノ台博）
- 「昔の道具と暮らし」ワークシートを作成・配布し、探検形式で学習できるように工夫している。（館山市博）
- 「河川改修展示」展示を見てクイズに答えるように質問用紙を配布している。また、情報端末にオリジナルキャラクターを採用し、親しみを持たせられるよう工夫している。（関宿城博）
- 小学校中・高学年向け「展示探検ワークシート」を作成・配布し、展示資料をよく観察すると答えがわかるように構成している。このシートを全部答えると、必然的に展示全体を回るようになっている。学校の見学で、グループ活動としてよく利用されている。（八千代市博）

【別紙３】７「年間事業予定」の中に、子どもを対象とした講座等はありますか。

①「有」とお答えの館にお尋ねします。どのような事業か、具体的に教えて下さい。

館主催（県立現代産業科学館） クリスマスｉｎ科学館 など38日 財団連携 科学館子ども教室 など21日 展示・運営協力会 実験・工作教室 など35日	・各種教室・講座は、館主催か連携（千葉県教育振興財団、展示・運営協力会、各種団体など)で行っている。実験・工作教室は保険料の50円だけを徴収するものと、実費を徴収するものがある。※展示・運営協力会・・・博物館活動の充実・発展のために県内の大学や企業と連携し、展示や教育普及活動を行う組織。
企画展１ワークショップ （流れるシューアイランド）	履けなくなった靴をひとつの島に見立てて自分流にカスタマイズする。
企画展２ワークショップ （案出泉と一緒に紙芝居を作る）	案出泉とアイデアを出し合い、みんなが作る物語を紙芝居に完成させ、最後に紙芝居を楽しむ。
企画展３ワークショップ （親子でつくろうネットでマリオネット）	くだもののネットを使ってマリオネットを作り即興劇にチャレンジする。
企画展４ワークショップ （思い出縫いぬい壁飾り） （以上アンデルセン子ども美術館）	
博物館子ども教室 （流山市博）	体験型講座 ものづくり主体、月１回、年１２回、無料
小学生土器づくりの会 （千葉市加曽利博）	小学校５・６年生対象。遺跡から出土した土器もモデルに３日間かけえ各自ひとつの土器を作る。館職員や土器づくり同好会の指導のもと成形から焼成まで自身で体験する。定員２０名。無料
夏休み子ども博物館 （和洋女子大文化資料館）	内容：土器の拓本取り、紙粘土で土器づくり、民具で遊ぶ、本物の土器をさわって学ぶ。 ＰＲポイント：学芸員課程の学生が一緒に学んだり遊んだりする。無料
毎月１回程度館職員によるイベントを実施 ・アイロンビーズで遊ぼう ・マイプラネタリウム ・アニマルキャンドル作り （ＴＥＰＣＯ新エネルギーパーク）	毎回先着150名、参加費無料 →ビーズを並べてかわいいキャラクターを作る。 →紙コップでプラネタリウムを作る。 →やわらかロウを使って動物のキャンドルを作る。
夏休み小学生講座 （茂原市美術館・郷土資料館）	22年度は「軽量ソフトねんどで、土器をつくろう」 簡単で楽しい子供向けの講座を企画、参加費用は材料費。

はにわづくり教室 勾玉づくり教室 （芝山古墳はにわ博）	定員30名、夏休み最初につくり一ヶ月後に焼いて渡す 参加費（材料費）500円 参加費（材料費）300円
おやこ自然観察会 （市川自然博）	「昆虫」をテーマに博物館に隣接するフィールドで昆虫採集などを行い、身近な自然から生きものに興味を持ってもらう。平成22年度は、5月～9月までの毎月1回日曜日に開催。各回、広報などで募集。往復はがきによる申込制。こどものみの参加は不可。こどもをきっかけに子育て世代の自然体験掘り起こすことも目的。参加費：無料
本物の化石にさわってみよう （県立中央博）	石を砕いて化石を実際に取り出す体験講座。参加費：保険料50円
地びき網でとれる砂浜の生きもの （県立中央博）	地びき網を自分たちでひいてとれた生きものを観察する。参加費250円＋保険料50円
夏休み自由研究相談会 （県立中央博）	夏休み前半の１回目は、自由研究を行うにあたっての指導・助言を行い、後半の２・３回目は、採集した生物等の同定や研究のまとめ方の指導。参加費：無料
殆どの講座 （県立中央博）	基本的に、小学生以上を対象にしており、内容も参加者に合わせて調整している。参加費：材料費等の実費と保険料。
子どものための里山教室 （房総のむら）	親子を対象に植物の味を確かめたり、遊んだりする観察会。参加費：無料
子ども縁日 （房総のむら）	凧作りや昔語りなど、楽しみながら伝統的な技術に触れる。参加費：材料費
親子農家の一日 （房総のむら）	畑で作物の収穫、かまどでご飯炊きなど、農家の一日を体験し、生活の知恵を学ぶ。参加費：１組600円
子ども茶道教室 （房総のむら）	薄茶のいただき方や、茶室での礼儀作法を学ぶ。 参加費：450円
つないでビッグペイント・アート」 （県立美術館）	美術館の壁面に巨大絵画を作成するワークショップ。 参加費：500円
県民の日・その場でアート （県立美術館）	オリジナルカンバッジや様々な工作体験ができる。 参加費：500円
わくわくどきどきなつやすみアート （県立美術館）	子どものための展覧会「空の表現」とリンクしたワークショップ。オリジナルブーメランを作成。参加費：100円
親子でクラフト （県立美術館）	親子で焼物に挑戦。できた作品に植物を植えて楽しむワークショップ。参加費：800円
モノレールデコレーション （県立美術館）	千葉都市モノレールとの共同事業。コラージュ作品でモノレールの車両をデコレーション。参加費：800円
にじいろパレット（県立美術館）	企画展とリンクした事業。水彩表現を楽しむワークショップ。 参加費：1000円
100人ワークショップ～等身大からはじめよう～（県立美術館）	千葉大学と県内中学校美術部との連携事業。美術館の庭に巨大オブジェを制作するワークショップ。無料

土日講座※個々の講座に別タイトル有（千葉市科学館） かがく探検隊※個々の講座に別タイトル有（千葉市科学館）	ひと月におよそ6種類程度（それぞれ複数回、年間200回程度）を実施。参加費：無料（要入館料）。 夏休み中に、1～3コマで完結する講座を実施。テーマは複数、実施回数は30回程度、参加費：無料（要入館料）
サイエンスショー※個々の講座に別タイトル有（千葉市科学館）	ひと月に3～4回程度実施。3ヶ月に1回程度、内容を更新。参加費：無料（要入館料）
みんなの科学教室※個々の講座に別タイトル有（千葉市科学館）	対象別（小・中学生など）の連続講座。参加費：無料（要入館料）
少年少女科学クラブ（千葉市科学館）	科学工作を行うクラブ。年度初めに参加者を募集し、1年間の科学工作活動を通じて、科学的なものの考え方や豊かな創造力を育てる。参加費：無料（要入館料）
アストロクラブ（千葉市科学館）	天体望遠鏡を製作して望遠鏡の仕組みを学ぶと共に、天体観測を通じて天文や宇宙への関心を高めるクラブ。参加費：無料（要入館料）
その他（千葉市科学館）	・青少年のための科学の祭典　千葉大会・理科研究相談会 ・WRO JAPAN千葉予選会 ・千葉市立小・中・特別支援学校　児童生徒作品　総合展覧会科学部門 ・火星ローバーコンテスト in 千葉 ・コズミックカレッジ　※上記は全て、一般来館者を対象。学校団体を含め、団体での予約はできません。
歴博探検（国立歴史民俗博物館）	「茶わんのひみつ」、「歴博のあさがお」などさまざまなテーマで、当館の研究者１名が「隊長」となり、調査室など博物館の裏側を見学したり、展示されていない博物館資料を見たり、展示資料の新しい見方を学ぶ、体験学習型プログラム。対象：小学校３年生～６年生。5月、8月、12月、2月の年4回、第2土曜日に実施。参加費：無料
れきはくをかこうよ（国立歴史民俗博物館）	夏休みに実施。常設展示を会場とし、担当研究者より展示室の解説を聞いた後、参加者が好きな展示物を選んで色鉛筆でスケッチをする。ゆっくりスケッチできるように、画板と折り畳み椅子を提供。スケッチ終了後、描いたモノについて、展示物の背景にあるストーリーを含め、研究者に説明してもらう。書いた作品は、保護者承諾の上で、ホームページで公開。対象は小・中学生。参加費：無料
体験コーナー（国立歴史民俗博物館）	夏休み中（お盆前後の土日）に、エントランスホールにて開催。展示と関連する実物資料やレプリカを利用し、歴史の面白さを伝え、これから見学する展示室の興味関心を高めるのが目的。未就学児や小学校低学年でも歴史に興味が持てるよう、また、展示室に入る前に利用することが多いため、あまり時間のかからない体験活動を意識しながら内容を企画。過去に、屏風のパズルや、絵馬作り、旅道具体験や妖怪絵巻作りなどを行った。

親と子の歴史見学会 （船橋市郷土資料館）	
鎧武者に変身 （君津市久留里城址資料館）	GWに実物の鎧のレプリカの試着体験。 無料
折り紙飛行機教室 （航空科学博物館）	
植物画に挑戦 タマゴの虜 （市川市芳澤ガーデンギャラリー）	身近な植物を描くワークショップ。 タマゴを使った工作教室
自然観察と葉っぱのしおり作り 飛ばせ水ロケット 将棋大会 新春凧揚げ （県立関宿城博）	採集した植物で葉っぱのパウチをする。100円 ペットボトルのロケット作り。200円 子どもの部64名のトーナメント戦。無料 凧揚げ大会を開催。無料
体験幽学工房 （大原幽学記念館）	小学高学年を対象に、勾玉作りなど。材料費徴収
八犬伝の団扇作り （館山市博物館）	房州団扇として南総里見八犬伝の錦絵のデザインの団扇を作る。無料
陶芸教室・万華鏡作り・しぼり染め ろうけつ染め・手作り団扇・凧作り 泥メンコ作り・キャンドル作り （市原市水と彫刻の丘）	材料費徴収
縄文体験ワークショップ （船橋市飛ノ台史跡公園博物館）	勾玉作り・どんぐりクッキー作り・火興し体験 粘土で縄文の形作り・紙の土偶作り・縄文ちぎり絵作り　材料費徴収　各10～200円
子ども講座 （鎌ヶ谷市郷土資料館）	勾玉作り・アンギン編みでコースター作り 勾玉のみ100円
袖ヶ浦自然探検 （袖ヶ浦市郷土博物館）	身近な動植物と触れ合う。小4以上　保険50円
子ども歴史教室 （鴨川市郷土資料館）	地域の伝統工芸である万祝の染め付け体験。 参加費：1,000円
夏休み体験講座 （山武市歴史民俗資料館）	茶道体験・わらじ作り・勾玉作り・火興し 無料～100円
夏休みアフロスタッフイベント 巣箱教室 探鳥会＋自然観察会 （我孫子市鳥の博物館）	鳥の体の仕組みを学ぶ。 シジュウカラの巣箱作り　800円 手賀沼の散策
稲毛子ども航空科学クラブ 稲毛エジソンクラブ （稲毛民間航空記念館）	「飛ぶ」実験・工作　年12回　5,000円 航空科学実験　年12回　6,000円
美術教育サポート （川村記念美術館）	対峙型鑑賞教育　１クラス　3,500円

体験教室 （印西市印旛歴史民俗資料館）	拓本・アンギン編み・土器作り・勾玉 50～200円材料費徴収
バター・アイスクリーム作り （千葉県酪農の里）	地元の牛乳・タマゴを使う調理教室。1,000円
子ども自然観察会 昔の暮らし体験教室 （松戸市立博物館）	トンボを観察する。 田起こしから脱穀まで米作り体験。 水桶担ぎ体験・風呂敷体験・自分で作る糸・布ロウソク作り・石製縄文ペンダント作り
親子体験教室 雅楽体験 伝統装束体験 （八千代市立郷土博物館）	勾玉作り・立体凧作り・ミニひな人形作り ミニ門松作り　200～500円材料費徴収 笙・篳篥・龍笛の体験　参加費500円 日本・韓国の伝統装束の体験　500円

【別紙４】７②出前講座等、学校等の依頼により適宜行っている子供たち対象の講座、　メニューを用意していますか。

小中学生団体向け工作教室 出張講座（県立現代産業科学館）	・内容は、「化石のレプリカ」や「ふうせんスライム」など、事前に県内全小・中学校に知らせてある。費用としては、材料費（100円程度）を徴収している。・学校からの依頼があれば、各学年の理科、総合的な学習の時間に沿った内容のものを実施する。
出張アトリエ （ふなばしアンデルセン）	簡単にできるプログラムを美術館スタッフが指導しながら制作を楽しむ。
昔の道具・昔のくらし （流山市博）	小学校４年生の社会科学習に対応。 ・道具の出前と調べ学習での導入
（千葉市加曽利博）	学校への出前講座（小学校６年生対象） ・縄文時代についての講義 ・博物館での縄文体験（石器で肉を切る、火起こし、縄文土器で煮炊き、スープの試食） ・壁新聞づくりと発表会、展示 イベント等への出張 ・市生涯学習フェスティバル（アンギン編み） ・市遺跡発表会（アンギン編み） ・モノレールまつり（火起こし）
国府の成り立ちを考えよう 考古学と発掘を解剖しよう 超電導ショー（液体窒素を使用） （和洋女子大文化資料館）	内容：地域の小学校を対象として国府について学ぶ。 ＰＲ：学芸員課程の学生が土器を実際にさわりながら小学生に教える。無料 内容：地域の中学校を対象として考古学について学ぶ。 ＰＲ：同上、無料
（ＴＥＰＣＯ新エネルギーパーク）	来館される小学校で事前の申し込みをしていただき実施。無料 学校からの依頼により内容を決め出前講座を実施。
校外学習への対応（小学校６年向け） （茂原市美術館・郷土資料館）	２２年度は「茂原の縄文～弥生時代」「茂原の地名」を行う。基本的には「身近な歴史」についての講座。
（芝山町立芝山古墳・はにわ博）	学芸員による実物資料を用いた縄文～古墳時代についての解説（土器、はにわ、鉄剣、銅鏡レプリカなど） 縄文土器、はにわの破片は１人１点ずつ配る。
（市立市川自然博）	「学校支援活動」は、博物館活動の中でも重要な位置づけとしている。自然観察体験プログラムの要請が多い。湧水の流れる谷津地形の自然観察園の一角を水辺の生きものを採集し観察するゾーンとして位置づけ、指導支援している。各学校によって体験の位置づけや所要時間、季節が異なるため、事前の打ち合わせを徹底し、引率する教職員の指導も行なう。
中央博調査隊 （中央博）	学校により各学年に合わせたフィールドでの自然体験、学校周辺や学校敷地内での自然観察指導、教室での地域の自然紹介授業などの依頼が多数ある。

森の調査隊 （中央博）	ワークシートを用いて子どもたちに博物館を調査してもらう体験型プログラム。小学校低～高学年まで様々な子どもたちを対象。学校からのリクエストに応じて行う。 上記中央博調査隊の「生態園」版。
夏休み科学論文作成指導 （県立中央博）	君津市・袖ヶ浦市教育委員会の依頼で、学校、公民館等において児童生徒への指導を行う。
焼き物焼成（房総のむら）	学校の要望により、焼き物焼成を支援する。300円
灯りの歴史体験キット その他学習支援 （県立房総のむら）	灯火具やその燃料の歴史と千代紙ろうそくを作りキットの貸し出し。350円　応相談
おもしろ鑑賞教室 （県立美術館）	来館した児童・生徒に対してのギャラリートーク。要望があれば館内探検も行う。
出張鑑賞授業（県立美術館）	複製画やアート･カードを用いて，学芸員が出張鑑賞授業を行う。
複製画貸出（県立美術館）	本館所蔵の４５点の複製画の貸出事業。
アート・カード貸出 （県立美術館）	複製画をアート・カードにしたキットの貸出事業。複製画と併せての利用が可能。
パソコン鑑賞授業 （県立美術館）	来館が困難な学校向けに，学校のパソコンルームを使用して，本館作品を楽しむプログラム。 学芸員が出張授業を行う
学校団体向けプログラム　※学校団体のみ対象 （千葉市科学館）	実験や工作、サイエンスショーを実施。参加費無料。学校団体が学習目的で科学館を利用する際、事前申し込み（先着順、前月10日までに申し込み）をして、利用。
プラネタリウム学習投影　※学校団体のみ対象 （千葉市科学館）	小・中学校理科の天文学習の内容に沿った投影や、宇宙への興味・関心を高める天文学習の導入・発展向け投影など実施。事前の申込み（先着順、前月10日までに申し込み）。学校授業の進度に合わせたプログラムを選択し、利用可能。 幼稚園・保育園、高校、その他の学習目的で利用希望する団体向けプラネタリウム投影も行う。学習目的の学校団体は無料。
星空観察会 （千葉市科学館）	希望する学校団体に対し、望遠鏡・双眼鏡等の機材を持参し、屋外での星空観察や解説を行う。事前の申込み（先着順）をし、応募者多数の場合は抽選で、訪問先を決定。費用：無料 外部団体の依頼により職員が館外に出向いて講座等を行うことはしていない。
ガイダンスとプログラム （国立歴史民俗博物館）	学校対応は、資料の読み解き方を伝えるガイダンス（約20分）と、研究者の視点に立ち、じっくりと資料を読み解くプログラム（約45分）の２つを用意している。 参加費：無料。
伊能忠敬の測量方法 （伊能忠敬記念館）	忠敬の測量技術や伊能図についての説明。
スライドショー （川村記念美術館）	美術館で行う作品鑑賞を、学校で行う。

飛行機解説員 （稲毛民間航空記念館）	学校の要望により、専門の解説員を飛行機に配置する。
体験講座 （山武市歴史民俗資料館）	学童保育や小学校を対象とした講座。 火興し・勾玉作り・土器作り
出前講座 （鴨川市郷土資料館）	学校のテーマに応じた講師の派遣。 （戦争体験など）火興し・勾玉作り
古代人体験 昔の生活体験 （袖ヶ浦市郷土博物館）	勾玉作り・本物土器観察・古墳見学 昔の灯り・石臼・アイロン・野良着・餅焼き
6年生社会科授業 4年生総合授業 （鎌ヶ谷市郷土資料館）	縄文人の生活ウオッチング ストップ・ザ・戦争
移動博物館 ワークショップ （船橋市飛ノ台史跡公園博物館）	博物館の展示案内（縄文時代） 紙土偶作り・黒曜石体験
出前講座「八犬伝物語」 （館山市立博物館）	「南総里見八犬伝」をわかりやすく解説。
関宿城下町体感キット （県立関宿城博物館）	城下の模型を学校に展示する。
地元アーチスト出張授業 （市川市芳澤ガーデンギャラリー）	地元の写真家などが小学校に出向き、それぞれのテーマで授業を行う。（例：絵はがき作り）
鎧体験 （君津市久留里城址博物館）	学校で鎧試着体験を行う。
昔の道具 勾玉作り 雅楽体験（大学連携） 伝統装束体験（大学連携） 学区フィールドワーク （八千代市立郷土博物館）	昔の道具を見せ、用途を考えさせて、正解を導く。 学校で勾玉作り。 学校で雅楽入門。（笙・篳篥・龍笛） 学校で十二単や狩衣の体験。 学区の文化財を徒歩や自転車で巡り、ワークシートの質問に答えていく。

【別紙５】９　学校訪問、パンフレット配布等、館（地域）で行う講座等の事業を小・中学校教員、児童生徒等を対象として具体的にアピールするための手段がありますか。

①具体的にどのような活動を行っていますか。

- 毎月、「博物館だより」を発行し、小学生には全員に配布、幼稚園、保育園、中学校には掲示用として配布している。季節に応じた浦安についての記事や博物館でのイベントのお知らせなどを掲載している。（浦安郷土博）
- 「博物館通信」を不定期で発行している。小中学校の教員に向けて、予約の仕方や留意点などを載せている。（浦安郷土博）
- 学校が博物館を利用するときの具体的な体験活動例などを載せた「浦安市郷土博物館　活用のてびき」を市内小学校の全担任に配布し、学校との連携を図っている。（浦安郷土博）
- 市内小学校の3年生全員に「文化財マップ」と児童用解説書を配布し、郷土学習に利用してもらったり、博物館を活用した学習ができるようにしている。（浦安郷土博）
- 学校関係の集まりでのアナウンスと資料配布。（千葉市美術館）
- 展覧会ごとに、学校長宛に案内（手紙、チラシ、チケット）を送付。（千葉市美術館）
- 企画展によっては、子ども向けのチラシをつくり、学校を通して全校児童生徒への配布を依頼。（千葉市美術館）
- 学校等への専任の営業担当者がおり、学校団体向けの専用のパンフレットを配布して普及活動を行っている。（鴨川シーワールド）
- 「考古･歴史博物館だより」、「教育いちかわ」・リーフレット等により教育委員会内の日通便ボックスを利用している。（市川考古学）
- 「広報いちかわ」・地域のミニコミ誌掲載によるアピール。（市川考古学）
- 「考古･歴史博物館だより」、「教育いちかわ」・リーフレット等により教育委員会内の日通便ボックスを利用している。（市川歴博）
- 小中学生団体向け工作教室は、県内全小学校に館の案内と一緒にチラシを配布している。（現代産業）
- パンフレットを作成して利用された団体や周辺の小学校に郵送、インターネットを充実しながらＰＲ。（アンデルセン）
- ポスター・チラシの配布。（流山市博）
- 東上総教育事務所の学校あてボックスに館主催事業のポスター、チラシを配布。（睦沢）
- 市内の小・中学校・教育委員会などにポスターとチラシを送付。（和洋）
- 市町村教育委員会へ…年２回訪問（パンフレット配布）
  近隣４市の小学校全校…年１回訪問（パンフレット配布）（ＴＥＰＣＯ）
- 茂原市教育委員会・小中学校長、教頭及び幼稚園長合同会議」の場で館の展示計画、小中学生向けの事業を紹介している。（茂原）
- 本年度は山武地区の社会科担当小中学校教員研修会があり、その場で博物館事業の内容を説明した。（芝山古墳はにわ博）
- 毎月、「博物館だより」を発行し、小学生には全員に配布、幼稚園、保育園、中学校には掲示用として配布している。季節に応じた浦安についての記事や博物館でのイベントのお知らせなどを掲載している。（浦安郷土博）
- 「博物館通信」を不定期で発行している。小中学校の教員に向けて、予約の仕方や留意点などを載せている。（浦安郷土博）
- 学校が博物館を利用するときの具体的な体験活動例などを載せた「浦安市郷土博物館　活用のてびき」を市内小学校の全担任に配布し、学校との連携を図っている。（浦安郷土博）

- 市内小学校の3年生全員に「文化財マップ」と児童用解説書を配布し、郷土学習に利用してもらったり、博物館を活用した学習ができるようにしている。（浦安郷土博）
- 学校関係の集まりでのアナウンスと資料配布。（千葉市美術館）
- 展覧会ごとに、学校長宛に案内（手紙、チラシ、チケット）を送付。（千葉市美術館）
- 企画展によっては、子ども向けのチラシをつくり、学校を通して全校児童生徒への配布を依頼。（千葉市美術館）
- 学校等への専任の営業担当者がおり、学校団体向けの専用のパンフレットを配布して普及活動を行っている。（鴨川シーワールド）
- 「考古・歴史博物館だより」、「教育いちかわ」・リーフレット等により教育委員会内の日通便ボックスを利用している。（市川考古学）
- 「広報いちかわ」・地域のミニコミ誌掲載によるアピール。（市川考古学）
- 「考古・歴史博物館だより」、「教育いちかわ」・リーフレット等により教育委員会内の日通便ボックスを利用している。（市川歴博）
- 小学生向けパンフの作成。（君津市久留里城址博物館）
- 小学生向け情報紙への情報掲載、企画展チラシの学校配布。（いすみ市郷土資料館）
- 学校への展示会ポスター・チラシの配布。
  （市川市芳澤ガーデンギャラリー・関宿城博・館山市博・船橋市飛ノ台博・袖ヶ浦博山武市歴民・松戸市博・八千代市博）
- 市内校長会、教頭会へのチラシ配布。（鴨川市郷土資料館・印西市印旛歴民・松戸市博・八千代市博）
- 市内公共機関への学校即応可をうたったポスターの掲示。（稲毛民間航空記念館）

【別紙６】10　館（地域）に、小・中学校教員がメンバーとなっている博物館運営推進のための組織がありますか。（博物館協議会を除く）

②組織について、その具体的な活動状況などを教えて下さい。

- 浦安市郷土博物館の基本コンセプトである「学校教育に生かせる博物館」を推進するため浦安市郷土博物館活用推進委員会を設置している。年間6回の活用推進委員会において、博物館のより良い活用方法を話し合ったり「ふるさと浦安作品展」の内容を吟味したりする。（浦安郷土博）
- 夏季休業中に児童生徒のふるさとに関する研究の相談員も務める。（浦安郷土博）
- 千葉市教育研究会造形部会内に、美術館連携グループがある。＜教員の研究会に学芸員が参加＞(千葉市美術館)
- アンデルセン公園子ども美術館運営審議会
  学識者３名　小学校長代表１名　幼稚園長代表　１名
  年１回美術館の運営方針及び事業計画等を審議していただいている。（アンデルセン）・来年度設立予定（県立中央博）
- 独自に学識経験者・学校・博物館関係者・ホテル業界などから委員を委嘱し、「経営アドバイザー」会議を開催し、具体的な事業展開手法などのアドバイスを受けている。（房総のむら）
- 「博物館運営推進」が目的ではなく、学校教員が主体となり、「博物館と学校の連携の仕方を考え、それを博物館が支援していく」目的の「博学連携研究員会議」を開催。２年任期で、全国に公募をかけ、小・中・高等学校の教員15名程度から構成。歴博の資料・人材・研究成果などを活用した、汎用性のある授業実践を考えてもらい、その実施、そしてその成果や指導案を、報告会開催やホームページを通じて発信している。第一期の活動からは、遠方でも利用できる貸し出し教材開発の提案を受け、試作品を試行、そして完成品制作に至った。今年度から、第二期が始まった。（国立歴史民俗博物館）
- 年1回運営協議会を開催。（いすみ市郷土資料館）
- 「先生のための博物館活用講座」を設け、博物館活用に興味のある教師を発掘し、その先生方を組織化することを計画中（八千代市立郷土博物館）

【別紙７】　１１　最後に学校や子どもの博物館利用についてご意見・ご提案などあればお願いします。

- 博物館を小中学生が積極的に活用できるよう「子どもチャレンジ」という活動を行っている。受付で登録をし、館内で非常勤職員やボランティアと一緒に体験活動をする。全部合格すると認定証がもらえる。活動はべか舟こぎ・舟のそうじ・ベーゴマ・文化財住宅のそうじ・手作りおもちゃ・浦安の貝の名前を覚えるなど。ちびっこコース、初級、中級、上級コースにわかれている。（浦安郷土博）
- 学校や幼稚園・保育園の体験活動後に、多くの子どもたちがリピーターとして家族や友達と再び来館している。学校や園との連携を図り、学習の場として博物館を活用していることの重要性を感じる。（浦安郷土博）
- 近年、学校団体による利用は増加傾向にある。学校側のレクチャー等要望内容や、水族館利用の目的をより明確に提示していただくことによって、さらに充実した対応が可能になるものと思考します。（鴨川シーワールド）
- 小中学校が博物館に求めるニーズの把握が必要。（千葉市郷土博）
- 中・高校生の職場体験を受け入れている。
  （１日５人程度まで、連続２～３日程度まで）（流山市博）
- 15年くらい前、週休２日制が学校に導入されたころ、「博物館と学校の連携を」などを考えて、子ども向けプログラムを実施したことがあったが、効果があまりなかったので今は中止している。（睦沢）
- 中学校、高等学校の利用増加を図りたいが、授業カリキュラムやクラブ活動などにうまく適合しておらず、職場体験や訪問調べ学習などの利用に限られている。各学校で教職員間の情報共有や相互支援がなされておらず、毎年、各担当の教職員に一から指導する繰り返しとなっている。教職員の研修プログラムへの組み込みなども検討しているが、市教育委員会が行なう教職員研修に加え、県教育委員会が行なう研修もあり、スケジュール的に厳しい。
  学校利用ばかりでなく、親子や三世代など家族、家庭を基本とした博物館利用により、自然体験の共有や世代間コミュニケーションの場となりうると考えている。（市川自然博）
- 千葉県の施設見学の一環としての来館は、実質１時間以内の見学時間となり、グループ毎に展示室を駆け抜けるという内容になっている。教科学習の中の校外学習として、博物館学習が位置づいていないというのが現状である。このような現状から学校側に博物館活用についての意識を高めるために、博物館学習の推進を図っているところである。そのために、実質的な「博学連携」が必要であり、教員のスキルアップのための研修会や研究会などの組織的な対応が必要になっている。現在、来年度の設立に向けて体制を整備しているところである。（県立中央博）
- 市町村教育委員会レベルの制度として美術館来館が組まれていないと，多数学校の来館は見込めない状況にある。当館では，来館を待つよりも，積極的に美術館の持つ教育力を学校に向けて輸出していく努力をしています。平行して，夏休みなどには「学校では体験できない規模のアート」のワークショップを行い、来館動機を育ている。（県立美　術館）
- 各博物館ごとに理念や展示資料、研究活動、そして利用者の特性が異なるため、それぞれの館ごとに、どのような活動がふさわしいかは異なるだろう。また、まず体験や活動ありき、ではなく、その体験活動にどんな意味があるのか、どう理念や展示、研究につながっているのか、そこを明確にしたうえで、事業実施や内容を考えていく必要があると考える。（国立歴史民俗博物館）
- 他館の様々な取り組みを知り、積極的に小・中学校連携プログラムを立ち上げていく。（市川市芳澤ガーデンギャラリー）
- 館の事業を積極的に周辺の学校に広報すべきである。出前授業の要望は、できるだけ日程調整して実現できるよう努力している。（県立関宿城博物館）
- 教員引率の学校見学は、入館無料とする、子どもだけの見学も土曜日のみ無料にするなど学校や子ども達をしやすくしている。（館山市博）

- 教育普及を得意としている学芸員が異動でいなくなってからは、思うように学校利用が促進できない。小・中学校の先生方と博物館職員が、じっくり意見を出し合える場を設けたい。（鎌ヶ谷市郷土資料館）
- 博物館、資料館、美術館は、地域の第二の学校とならなくてはいけない。そのためには、学校職員との共通理解が図れる場を教育委員会等に設定して頂き、定期的に先生方とのコミュニケーションを取ると同時に、協働での研究授業や、年間指導計画への博物館活用の位置づけなど、学校への積極的な働きかけが不可欠である。また、保護者を博物館側の協力者として、学校対応サポーター等として登録頂くなど、地域や保護者の力を活かすことが重要。「地域の子どもは地域で育てる」というスタンスが、これからの博物館教育の方向性の要となると考えている。（八千代市立郷土博物館）

平成２３年度　県博協・三博協 合同研究年間計画

時　期	主な活動内容	会　場
５月１２日	・第３回合同委員会 施設見学と質疑応答 今年度の活動計画について 千葉県加盟館への視察計画について 合同シンポジウムについて 研究紀要の発行について	八千代市立郷土博物館
７月１３日	・合同見学会（三博協加盟館） 施設見学と質疑応答 団体対応の見学（幼稚園）	浦安市郷土博物館
１１月１０日	・合同研修会（両会委員） 「ホテルマンから学ぶ子ども対応」 合同委員会 シンポジウムについて	シラトングランデトーキョーベイホテル
１月１９日	・合同シンポジウム（両会加盟館） 基調講演 事例報告 パネルディスカッション	千葉県立中央博物館
２月中旬	・研究紀要原稿とりまとめ 編集・校正	委員会事務局
３月下旬	・第４回合同委員会 ２年間の反省と今後の展望について	
	・研究紀要発行 加盟館・三博協発送	協会事務局

※（三博協加盟館）とあるのは、三博協加盟館職員の参加を前提とした研修会等である。
※（両会加盟館）とあるのは、両会の加盟館職員の参加を前提とした研修会等である。